

盛会だった51年度総会

財団法人諏訪清陵会の設立決まる



学年別にも幹事を

会長には大森氏再選

昭和五十一年度諏訪清陵
高校同窓会総会は、九月十
一日午後一時半から同校体
育館で会員約百人が集まっ
て開いた。昨年、創立八十
周年記念式、同記念総会な
どが行われた後だけに、こ
れまでの総会に比べて出席
者も多く実のある総会だっ
た。

大森会長、小菅重男校長
のあいさつがあつて藤森楨
次諏訪支部長を議長に選出

会務報告、創立八十周年記
念事業の中間報告がなされ
会則の一部改正、財団法人
・諏訪清陵会の設立など重
要議題の審議に入り、これ
を万場一致で決めた後、役
員改選を行った。

会務報告 ▽五十年年度事
業、四十九年度会計監査
(六月十九日)、三沢文庫
運営委員会(六月二十七日)
第一回幹事会(創立八十周
年記念事業など、同日)、
第二回幹事会(同、八月五

日)、創立八十周年記念式
典(先輩と在校生が語る会
記念式典、講演など、十月
十日)、東京支部総会(十
月十六日)、創立八十周年
記念総会(千七百八出席、
十一月九日) 第三回幹事会
(募金、会報発行など、一
月六日) 茅野・原支部総会
(二月二十九日) 岡谷支部
総会(三月十三日) 下諏訪
支部総会(同日)。

▽五十年年度同窓会決算
収入の部(五二三、七八三
円)、支出の部(事務費一
五、〇〇〇円、会議費三七
三〇〇円、総会費二七六
九五円、旅費二、七二〇
円、需要費五、〇二〇円)
役務費二、〇三〇円、慶弔
費四三、三四五円、雑費一
七、八九〇円、総額三九九
二四七円、差引残額(一一
四、五三六円)。

七、〇〇〇円、会議費二、
三〇〇円、需要費四八、三
九〇円、役務費一、二二〇
円、図書費九九、二四四円
、総額一九七、一四四円)、
差引残額(九二、四五三円)

▽五十二年度同窓会予算
収入の部(入会金四一四
〇〇〇円、前年繰越金一一
四、五三六円、雑収入八、
四六四円、総額五三三、〇
〇〇円)、支出の部(事務
費二〇、〇〇〇円、会議費
六〇、〇〇〇円、総会費一
七、〇〇〇円、旅費四〇、
〇〇〇円、需要費六、〇〇
〇円、役務費二、〇〇〇
円、慶弔費六、〇〇〇円
、雑費二、〇〇〇円、総
額五三、〇〇〇円、総
額五三七、〇〇〇円)。
▽同三沢文庫運営予算
収入の部(前年度繰越金
九二、四五三円、基本金利
息一五三、五〇〇円、雑収
入一五、〇四七円、総額二
六〇、〇〇〇円)、支出の
部(諸給四八、〇〇〇円、
会議費三、〇〇〇円、旅費
五、〇〇〇円、需要費六、
〇〇〇円、役務費五、〇〇
〇円、図書費五九、〇〇〇
円、年報発行費七、〇〇〇

募金五千万円突破!!

未応募の方は至急お申込みを

「協力に感謝」

本年三月「寄付金募集」についてお願いの趣意書を各学年委員或は各支部役員

未応募者は至急協力

協力下さった会員各位に御礼申し上げます。

全体の金額では、以上の通りであります。今まで協力して下さった人数は予定のまだ半数に達していません。

月未現在で

応募者数約三、一〇〇人
応募金額約五、二〇〇万円
となりました。

恐らくこの会報が皆様の
お手もとへ届く頃には六、
〇〇〇万円を突破するもの
と思います。

これは八十周年を機に、

同窓各位の同窓会に、また
母校にお寄せ下さるご気持
ちが、並々ならないもので
あることを示すものであつ
て、募金担当者一同誠に感
激を深くしているところで
あります。ここに改めてご

ります。

本年の総会において、同窓会則が大幅に改められ

要な点は、同窓会運営の要
である幹事に各卒業年次よ
り二名の幹事を送り込むよ
うにしたことであります。

これにより従来とく年輩
者の同窓会になり勝であつ
たものが若い者も参加でき
る全員の同窓会になったこ
とであります。こうした点

からも各卒業年次単位に相
応の責任を果していただき
たいと思います。

いろいろの手違いで、募

金趣意書がお手もとに届か
なかつたり、ご失念されて
おる向もあるようですので
ここで再発送いたすことに
なっております。何分のご
協力をお願いいたします。

領収は会報紙上で
領収は募金手帳(昭和

五十二年) 同窓会報誌上
に掲載をもって代えさせて
いただくことになっており
ますが、十月末までの分に
ついては、ここで領収を兼

ね札状を差上げましたので
ご了承下さい。なお今後の
分についても、到着次第領
収を兼ね札状を差上げる
ことにしております。

なお、免税のための領収
書の必要の方は、この旨お
申し出下さい。本年の総会
において、母校の教育支援
のため、募金の一部をもつ
て財団法人「諏訪清陵会」

の設立が決議され、目下そ
の設立手続き中であります。
この財団の設立許可のおり
次第領収書をお送りいたし
ます。

これらのお申し出、或は
ご不明の点については左記
事務局までご連絡下さい。

諏訪市清水一
諏訪清陵高校内

同窓会事務局
(係五味兼太郎)

TEL 〇二六六五
八 〇三五六

財団法人諏訪清陵会 設立趣意書

「会員相互の交情を厚く
奨励しました。

し、兼ねて、郷風の改善を
目的とする。」として、旧
制諏訪中学校・現諏訪清陵
高校同窓会が設立されたの
は、明治三十六年八月のこ
とであります。

爾来今日まで、実に七十
余年の間、諏訪清陵高校同
窓会は、母校あるいは東京
あるいは支部各地において
毎年総会をひらき、会員名
簿を発行するなど、その本
来の目的とする会員相互の
親睦交流を深める事業を行
うほか、併せて、郷風の改
善のため、母校ならびに郷
土諏訪の教育の振興と学術
・文化の発展に寄与すべく
幾多の事業を行って参りま
した。

古くは、昭和の初め、母
校創立二十周年を祝い、記
念館を建設して、生徒の真
摯な自治活動の場を提供し、
その一角に、会員寄贈の古
今東西の古典を集めて文庫
を設け、生徒の自学自習を

奨励しました。
戦後間もなく、経済的苦
況のなかで行われた校舎の
全面改築は、会員多数の協
力を得てはじめて可能とな
ったものであり、ひき続き
行われた同窓会各期の記念
植樹の結果が、二十年の歳
月を経て、今日の母校の教
育環境を形成しているの
であります。

近くは、昭和四十年、母
校創立七十周年にあたり、
三沢勝衛先生記念文庫を設
立して、教育のあるべき姿
を不変不動のものとして、
今後一層、母校ならびに郷
土諏訪の教育の振興と学術
・文化の発展に寄与する目
的をもって、ここに総会の
決議を経て、その財産の一
部を寄付し、財団法人諏訪
清陵会を設立します。

昭和五十一年九月十一日
設立代表者
諏訪清陵高等学校同窓会長
大森 栄

ず、郷土諏訪の教育の振興
と学術・文化の発展に多大
の貢献をして参りました。

昨年、昭和五十年、母校
創立八十周年を祝い、同窓
会が計画実施した五つの記
念事業は、予期以上の多数
の会員の賛同と協力を得て、
今や同窓会は、組織的にも
経済的にも、未だかつてな
い強固な基盤を確立するこ
とができました。

想えば、この記念事業に
寄せられた数千人の同窓会員
の心は、母校ならびに郷土
を愛する心情の発露であり
ます。

諏訪清陵高校同窓会は、
この数千人の会員の心を集め
てこれを顕彰し、七十余年
にわたって継承された精神
を不変不動のものとして、

今後一層、母校ならびに郷
土諏訪の教育の振興と学術
・文化の発展に寄与する目
的をもって、ここに総会の
決議を経て、その財産の一
部を寄付し、財団法人諏訪
清陵会を設立します。

昭和五十一年九月十一日
設立代表者
諏訪清陵高等学校同窓会長
大森 栄

財団法人 諏訪清陵会寄付行為

第一章 名章と事務所

(設立)

第1条 諏訪清陵高等学校同窓会は、第4条に定める目的のため、別紙財産目録に掲げる財産を寄付し、財団法人を設立する。

(名称)

第2条 この法人は、財団法人諏訪清陵会（以下「本会」という。）という。

(事務所)

第3条 本会の事務所は、諏訪市清水一〇〇一―におく。

第2章 目的と事業

(目的)

第4条 本会は、諏訪の教育の振興と学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第5条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 育英事業
- (2) 高校教育の振興のために必要と認められる事業
- (3) 三沢勝衛先生記念文庫の運営
- (4) 学術・文化に関する講演会等の催し
- (5) その他目的を達成するために必要と認める事業

第3章 資産と会計

(資産の構成)

第6条 本会の資産は、次の各号に掲げるもので構成される。

- (1) 別紙財産目録記載の財産
- (2) 資産から生じる果実
- (3) 寄付金品
- (4) 事業に伴う収入
- (5) その他の収入

(資産の種類)

第7条 本会の資産は、これを基本財産および運用財産の二種に分ける。

2 基本財産は、次の各号により構成され、これを処分し、又は担保に供することができない。ただし、やむを得ない理由があるときは、理事総数の3分の2以上の同意を経、かつ、主務官庁の認可を得て、その一部を処分し、又は、担保に供することができる。

- (1) 別紙財産目録中基本財産として記載された財産
 - (2) 基本財産とすることを指定して寄付された財産
 - (3) 理事会で基本財産に繰り入れることを決議した財産
- 3 運用財産は、基本財産の元本以外の財産で構成される。

(資産の管理者およびその方法)

第8条 本会の資産は、理事長がこれを管理し、その方法は、理事会の議決により定める。

2 資産のうち現金は、郵便官署若しくは確実な銀行に預け入れ、信託会社に信託し、又は、国公債若しくは確実な有価証券に換えて、保管するものとする。

(経費支弁)

第9条 本会の経費は、運用財産をもって支弁される。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(事業計画および予算)

第11条 本会の事業計画およびこれに伴う収支予算は、年度開始前に理事会の議決を経て、主務官庁に届け出なければならない。事業計画および収支予算を変更した場合も同様とする。

(決算)

第12条 本会の収支決算は、年度終了後2ヶ月以内に、年度末現在の財産目録とともに監事の監査を経て、理事会の承認を受け、主務官庁に報告しなければならない。

2 会計年度末に剰余金を生じたときは、理事会の決議により、その全部又は一部を基本財産に繰り入れるか若しくは翌年度に繰り越すものとする。

(特別会計)

第13条 本会は、必要があるときは、理事会の決議により特別会計を設けることができる。

きる。

2 前項の特別会計から生じた収益または剰余金は、すべて基本財産又は運用財産に繰り入れなければならない。

(長期借入金)

第14条 本会が、借入金（その年度内の収入をもって償還する一時の借入金を除く）をしようとするときは、理事総数の3分の2以上の同意を経、かつ主務官庁の承認を受けなければならない。

第4章 役員と職員

(役員の種別および員数)

第15条 本会に、次の役員を置く。

理事 10名以上 20名以内
うち 理事長 1名

副理事長 1名
常務理事 2名

監事 2名

(役員の選任)

第16条

1 理事長・副理事長・常務理事は、理事の互選とする。

2 監事は、理事会の決議により、理事長が委嘱する。

3 理事と監事は、相互にこれを兼ねることができない。

(役員の職務)

第17条 理事長は、本会を統轄し、本会を代表する。

2 副理事長は、理事長を補佐し、理事長に事故があるとき、又は理事長が欠けたときは、その職務を代理する。

3 常務理事は、理事会の議決にもつき、常務を処理する。

4 理事は、理事会を組織し、本会の業務を議決し、執行する。

5 監事は、民法第50条に規定する職務を行う。

(役員任期)

第18条 役員任期は、2ヶ年とする。ただし再任を妨げない。

2 補欠のため就任した役員任期は、前任者の残任期間とする。

3 役員は、任期満了後であっても、後任者が就任するまでは、引き続きその職務を行うものとする。

(顧問)

第19条 本会に顧問を置くことができる。

2 顧問は、理事会の推薦により、理事長が委嘱する。

3 顧問は、重要事項について理事長の顧問に應じる。

(事務局および職員)

第20条 本会に事務局を置く。

2 事務局に、幹事および書記若干名を置く。

3 幹事および書記は、理事長が委嘱する。

4 幹事は、理事長の指示を受け、本会の事務を分掌する。

5 書記は、理事長の指示を受け、本会の事務に従事する。

第5章 会議

(会議の招集)

第21条 理事会は、理事長がこれを招集する。

2 理事の3分の1以上、又は、監事から会議の目的たる事項を示して請求があったときは、理事長は、理事会を招集しなければならない。

(会議の議長)

第22条 理事会の議長は、理事長とする。

(開会および議決の定数)

第23条 理事会は、理事の過半数の出席がなければ開会することができない。ただし、あらかじめ通知された議事について書面をもって意思を表示したものは出席者とみなす。

2 理事会の議事は、この寄付行為に別に規定するもののほか出席理事の過半数の同意をもってこれを決する。

3 可否同数のときは、議長がこれを決定する。

(理事会に付議すべき事項)

第24条 次に掲げる事項は、理事会に付議する。

- (1) 事業計画と収支予算
- (2) 事業報告と収支決算および年度財産目録
- (3) 諸規程の制定および改廃
- (4) 前号までに掲げるもののほか、理事長の付議した事項

(議事録)

第25条 理事会の議事については、次の各号に掲げる事項を記載した議事録を作成しなければならない。

- (1) 開会の日時および場所
- (2) 理事の現在員数
- (3) 出席理事の氏名(書面表決者を含む)
- (4) 議事の経過の概要およびその結果

2 議事録には、議長のほか、出席理事のうちから選出された2人以上の理事が署名押印しなければならない。

第6章 寄付行為の変更と解散

(寄付行為の変更)

第26条 この寄付行為は、理事総数の3分の2以上の同意を経、かつ、主務官庁の認可を得て、これを変更することができる。

(解散)

第27条 本会は、民法第68条第1項第2号から4号までの規定によるほか、理事全員の同意を経、かつ主務官庁の認可を得て解散することができる。

(清算人)

第28条 清算人は、理事会において選任する。

(残余財産の処分)

第29条 本会の解散の場合の残余財産は、理事全員の同意を経、かつ、主務官庁の認可を得て、本会の設立の趣旨および目的に沿って、その帰属を定める。

第7章 附則

(施行細則)

第30条 この寄付行為の施行について必要な細則は、理事会の決議により、理事長が定める。

(設立当初の役員)

第31条 本会の設立当初の理事および監事は、次に掲げる者とし、その任期は、第18条第1項の規定にかかわらず、昭和54年3月31日までとする。

〔理事〕	大森 米
	〔副理事長〕 山田 六一
〔監事〕	〔常務理事〕 小菅 重男
	石井 睦藏
〔理事〕	小口 慎三
	藤森 慎次
〔監事〕	平山 正健
	林 憲一
〔理事〕	竹内 丈夫
	松沢 達
〔監事〕	和田勘三郎
	宮坂 久臣
〔理事〕	尾沢 賢一
	寺島 和泉
〔監事〕	小松 定弘



- 1 本会の設立初年度の事業計画および収支予算は、設立者の定めるところによる。
- 2 本会の設立当初の会計年度は、設立許可のあった日から昭和52年3月31日までとする。

校歌「あゝ博浪の」の謎

作者雪窓とは何者であるか

第43回

原田福太郎

諷刺創立九年目の明治三十六年に、学友会誌第一号が発行された。その誌に、校風確立の運動の一つとして、校歌試作三篇が発表された。左の通りである。

1、境をめぐる山々は

（寄）茅野儀太郎

2、束に高さ八ヶ岳

寒水郎

3、あゝ搏浪の槌とりて

雪窓

本稿は「あゝ博浪」の作者である「窓」とは何人なるかを考証しようとする。

中島喜久平と校歌

清水ケ江の伝統が今に息
ずく格調高い校歌「あゝ博
浪」の作者は、文武両道
の俊才中島喜久平であると
いうのが、通説である。
当然であらう。

事、学友会誌七号（明治四十二年発行）には第二
中島は明治三十五年度の
学友会長をやった上、翌年

湧かしめるのである。

一方、この校歌の曲は、高寮歌の借曲であると、久しく伝えられてきた。元の曲が一高の何年度の寮歌であり、作曲者は誰であるかを照会したとは、きいていなかった。

今夏、ご来諏の五味智英

先生（二十八回）のご好意で、最新版の一高寶歌集が借用できたので、早速八十一年委員長で照会した。中島が入学した明治三十六年度、十三回記念祭歌八篇の一つ、小峰昇二曲、辻村鑑作「曉寄する新朝」の一曲であった。照合しにくかったのは「あゝ博浪」の前序三行はこの寶歌の曲ではなく

て「押し照る薔苳」の分
から一高の寮歌の曲を借り
ていたからであった。丸借
りではなかった。

ないか」と言う。

をうすると、中島が入学当時の寮歌のメロデーを頭に置いて作詞したことは、十分に考えられる。

中島の人となりと校歌の内容は、まことに見事に一致する。ましてメロデーが高寮歌の借曲となると、

中島の雅号（ペンネーム）

初期の学会誌の投稿文には、当時の風潮、傾向として、先輩・在校生を問わず、本名とペンネームが無く統一に使用されている。論説が本名、詩歌随想が雅号という類型化を試みてみたが、当てはめることはできなかった。

中島は一号から十号に十
二回投稿している。彼とて

例外ではない。「本名」六

「水雨」五回である。ご遺族の中島伸武氏によると、大学卒業後に「董歌」も使っていたという。中島は小

出版社経営の大学時代の友人の困窮を助けるため、印税なしで児童向偉人伝三冊を書いてゐる。その本の表紙には中島董畝著、奥書には本名が書かれてゐる。

「あゝ、浪」がのっている

論説文三篇を投稿しているが、何れも本名である。ペンネームの炭水は三号二回のみである。以後は本名と

水田の三つで、内倉によ
使ひ分けはしていない。す
なわち、中島のペンネーム
は「灰水」「水田」「葦畝
の三つだけであつた。
ただ驚くべきことは中島
の戒名である。「瑞雲院法
誓誠心雷窓居士」これは何
と考へればよいか。この戒
名は、中島家の檀那寺の今
はじき住職が付けたので、
聞くすべがない。思うに、
詠中の校歌が中島作である
ことは、住職を含めて関係
者には衆知の事であつた。
故人は生れながらの大賦の

かくみてくると、死後の戒名は別として、三十二年の短かな生涯において、中島自身は一度も「雪窓」と号した事はない。まさに「雪窓」は中島喜久平ではない。別人でなければならぬ。

別人の雪窓とは誰か

会誌一号から三号には、雪窓およびそれと同一と思われるペンネームが左の通りのつてゐる。

1、会誌一号校歌「あ

搏浪 雷窓

2、会誌一号「秋雜」

短歌
竹子

3、「運動会に就きての

所惑——論說文雪怨

4、杂志二号「高坐岭」

自由詩 雪子

8、会誌三号「歌のす

さび」短歌。雪窓子

9、会誌三号「友の奥

津城」追悼。雪窓子

一方雪窓の投稿と同一時

期の中島の投稿は、一号か

ら三号までに五回である。

1、「郷健児に呈す」

論説文

(註、一高一年)中島

喜久平

2、二号「須らく自奮

べき所以を論じ併せて

諸子が晩近の行為に及

ぶ」論説文 一高

中島喜久平

2、二号「寒夜の読書

一随想。中島喜久平

4、三号「花草鞋」

旅日記。中島秋水

5、三号「第三回諏訪

中学同窓会大会」一報

告 委員中島記

両者の文を読み比べ、内

容を類別検討すると、同一

人物でない事は明瞭である。

中島を「硬」とすれば、雪

窓は「軟」である。「武」

とすれば「文」である。し

かし、雪窓の3「運動会

に就きての所感」は運動部

一般化問題を正面より論及

した、諏中はじめての論理

整然とした「硬」派の雄筆

である。これは雪窓を一方

的に和文調の「軟」派「文」

ある。これは当時の首席の

学派と決めつけることの出

来ない論説文である。

そうすると、その文筆力

から推して、雪窓が、雄健

なる青春を謳歌した「あゝ

博浪」を作ることとは六つ

しいと断ずることはできな

い。

今を去る四十年前の昭和

十年の秋に、諏中四十年祭

が行われた。その最中に、

信陽新聞紙上に三回にわた

り、「あゝ博浪の校歌の作

者雪窓は竹内節二である」

という爆弾的投稿がのせら

れた。筆者は十三才下の節

二の実弟竹内省三氏である。

節二は当時中学三年生で

あった。小学四年・高等科

四年卒業の三年生である。

昭和の戦時下の中学五年生

秀才なら旧制高校一年生に

当る年代である。はたして

この学年にして、この校歌

をつくりうる豊かな詩藻・

國漢の表現力を持つ事が考

えられるだろうか。

たまたま、節二の中学一

年、二年、三年の成績表が

年の時は國漢三科の平均九

三・五、二年は九二点で

ある。これは当時の首席の

生徒と同列の学力である。

小沢俊雄先生(十九回)は

「明治期の國漢授業の程度

からすれば、三年生でもあ

る作詞は可能であろう」と

言われた。また、東大名譽

教授の五味智英先生(二八

回)のお話でも、先主自

身小学校六年の時、鵜外の

「即興詩人」を数度読みふ

けた経験からしても、当

時の三年生でその道に秀た

る生徒なら不可能とは言え

まいとの事であった。

節二は四年生の時、会誌

二号に「阿々録」と題して

自己を語っている。

「我に好む所あり。人いか

にこれを罵るも敢て意に

介せず。只我はこれにより

て安心立命を得むとするな

り。我の好む所は作文・説

書なり。我は十三才以来

文章を作る事を好み殆ど筆

を擱きしことなく(中略)

文章の中にも好むは抒情

文もしくは叙事文にして論

文は好む所にあらず。(中

略)かくてわがエネルギー

はこの二者のみに注がれて

他を顧むるの余地なきなり。

これによりて我は人生の赫

々たる希望の光を認むるな

り」

その文才を買われてか、

三年生から会誌の編集委員

となつて三ヶ年の職にあつ

た。また、節二が中学三年

の時に使用した同年発行の

山崎直方著「地文学教科書」

の裏中開きに「雪窓文庫」

の蔵書印がある。節二は当

時、雪窓と自称していた事

は歴然としている。

かくすると、雪窓のペン

ネームは竹内節二である。

「武」においては中島に劣

るが「文」にては相拮抗す

る。詩作についての学力と

素地は十二分である。この

校歌が節二の作であっても

異をはさむ事は出来ない。

「雪窓」変じて「喜

久平」と化した背景

を推測する

節二は五年生まで雑誌部

委員として名をつらわてい

るのに、卒業名簿からは姿

を消している。会誌編集の

終了した十二月末に、退学

していたのであった。何が

あったであろうか。

ここに、節二退学の驚く

べき真相が判明した。弟、

省三氏は四十年前の投稿文

にも、はばかり秘した事

を、今回は歴史解明の為に

明らかにした。すなわち質

朴剛健を校風確立の一つ柱

とせんとするに急なる折

生徒にあるべからざる「芸

者買い」をした事が露見し

たからであった。

節二の竹内家は、高島藩

御殿の流れを汲み眼科医

であり、その広大な屋敷と

ともに、郡下では名門の誉

が高かった。その次男で文

才衆を抜く生徒であったか

らには、処分する学校とし

ても「泣いて馬鹿を斬る」

の切なる思であったであろ

う。

竹内家と三百米と離れて

いない若き菊池久吉先生は、

当時は東洋大学へ転出して

いて、一時期担任であった

節二の件には関がしうる立

場ではなかった。しかし、

十年後の先生の日記には、

かつての教え子節二の追校

の無念さを言外に含めて、

目の前にした竹内家の没落

について、温かな同情を示

している

学校および雑誌委員会か

らすれば、歌詞がいかにす

ぐれていても、不名誉の退

学者の作を採用して歌う事

はまことに不都合であった

であろう。教育的見地から

採否に苦しい事であろう。

当時五年生の雑誌部委員

長の藤森勝郎は校歌制定の

経緯を昭和二十六年「校史

研究」に「思い出」と題し

て次のように述べている。

勝郎の小学校の恩師で

あった東京高師生の伊藤

長七に依頼して出来たのが

「東に高き」であり、

二年先輩の一高生茅野義

太郎に依頼して出来たのが

所謂第三校歌「境を

めぐる山々」であった。

(以上筆者要約)以上の

外に少々遅れて出たのが

私の一年先輩で当時の一

高生であった秀才中島喜

久平氏作の「あゝ博浪、

の歌であった。これは氏

が自発的に作ったか、誰

かに頼まれたのか審にし

ないが、兎に角以上の三

つが出来た。(以上原文

のまま)

まことに奇々怪々である。

責任者の雑誌委員長が依頼

もしないのに、後でくれ

て出来た上に「誰かに頼

まれたか審にしない」とし

て、ばかりすうな事を言っ

ている。寂然としない経過

は、その背後に教育的な含

みを感じさせる。

藤森が執筆した昭和二十

六年には、中島作と定説に

なっていた。これをくつが

えすだけの資料が藤森には

なかったため、こうした曖

昧とした発表しか出来なか

ったのではないだろうか。

しかし、雪窓の原作のま

まが現在の校歌とは思えな

い所が多い。それは前記の

明治三十六年度の中島の論

説文の中に、校歌と同一、

または同一の調べに近い詩

句が散見されるからである。

「いかで世の奴原が昏々た

る夜半」「快刀乱麻を断つ

の子」・「速きこと閃電の

如く」がある。また一高寮

歌「あゝ玉杯の」の一句

「その美俗の華を奪ひ」を

使っている。辞句のみなら

ず「あゝ博浪」のメロデー

が中島の一高入学年度の寮

歌のそれである。

「雪窓」と節二とはゆえ

この校歌からは秀才中島喜

久平の影を消すことが出来

ない。中島作と伝承されて疑わなかった事もけつして根拠のない事ではない。

伝統確立の熾烈な願望に加えて、日露の戦雲となる明治三十六年に「南洋東亜の人の子に、つくさでやまむ心かと」あるいは「あをひとくさはたによりて、平和の二字を得むとする」等の慨世救国の志を謳い上げているのは、いかにも中島らしいではないか。

節二に抒情の詩があれば、中島には述志の賦がある。原作者の雪窓とは節二と判明したが、中島なくしては現在の校歌はなかったと思われる。「文」の節二、「武」の中島の奇しくも、また見事な成果をここにみるのである。

以上の考察からして、推測が許されるなら私は次のように結論を下したい。

原作は雪窓であり、これに手を入れ、曲に合せて仕上げをしたが喜久平である。

「論証は真実性を減殺する」との古代の格言がある。論証に急の余り、わが母校校歌制定の、含蓄多い経過

の事実を曲げていないかと恐れる。事ここに到つては、

はまことに有難いものと、恐れる。事ここに到つては、

中島家、竹内家および一統、小沢俊雄、五味智英、今井正明、今井信雄の各先生、諏訪市立図書館、菊池貞衛氏、宮坂亮一氏、清陵高校八十年史委員、清陵高校教職員。

※本稿を草するに当り、左の方々の惜しみないご協力をいただきました。同窓生 (諏訪市・原田商店社長)

途中で変ったメロデー

第50回 宮坂 亮 一

校歌「あゝ博浪の」の作譜(以前、ハーモニカの楽詞者が中島喜久平氏か竹ノ譜として使用されていた)

内雪窓氏かと言う作詞者をめぐむ怪の他に、作曲者不詳で今日に及んでいるこの校歌のメロデーが、かつての学友会誌に記載されている楽譜と大いに相違していることに気付かれています。

同窓生諸兄に話題を提供することにより、事の真相が後日解明されることを期待しつつ、御依頼の本稿の筆をとらせていただく次第である。

手許の資料によると、学友会誌に初めて発表された明治四十二年の楽譜は数字

はまことに有難いものと、恐れる。事ここに到つては、

ディーに近似しているが、いすれにせよ長調から短調への転換が比較的短期間

(小生の調査に基づく推定では昭和二年から三年の頃)に行なわれたらしい。元来、

歌詞の誤唱や旋律の自律的変換が歌唱者の立場で部分的に行なわれる現象はしばしば経験するところである

が、曲の調子が明るい長調から暗い短調へがらりと変わる曲全体の変換は、余程の大きなエネルギーが内部的に加えられたものとした

事である。音楽的に見ると、江戸時代に入ってから陽旋法よりも陰旋法が都市部で愛好される傾向が強まり、近松の心中ものゝ影響もあって、

明るい陽旋法より暗い陰旋法の方が情緒に富み上品とされている。例を上げれば

校歌にこと欠かぬが、雅楽の明い曲である「越天楽」が、今様となつて北九州で

暗い曲の「黒田節」に変化している。「佐渡おけさ」も本来は明るい旋律であつたのである。明治に洋楽が

輸入され長調、短調の二つのうち日本人は次第に短調の方を愛好する傾向になつたのも、江戸時代の伝統を受け継いでいるものとされ

的要因となつたのかも知れない。それにしても大正七

年入学のM氏(故人)が学譜通りの長調で歌つた「あゝ博浪の」は極めて印象的であつた。日本一長い校歌

の単調さをやぶる第一校歌から第二校歌への転調ぶりは、音楽的に実に見事なものだが、失礼ながら、質朴

な誠中生にその様な才覚があつたとは考えられず、尊敬する先輩一高生の強力な指導でもあつたのか? この怪事の謎は何時解けるのであろう。証人の出現を期待する。

年史を機に真相究明を

第36回 岩 波 泰 明

校歌「あゝ博浪の」の作詞者が、竹ノ内節二氏ではないかという話を聞いたのは、昭和二十四、五年ごろであつた。節二の実弟竹ノ

内省三氏から、「諏訪市大和の折井衛氏(故人・第二回生)が、あの作詞者は中島喜久平氏となつてい

るが、実は君の兄さんの節二氏の作だよ」といわれたことがある」というのである。私はこれを聞いて、面白

い話題だと思つた。野次馬根性はないといえはウソになるが、同窓生の一人として、これは究明するに足る問題であると考えた。もう

そこで、私は、当時の事情を知り得ると思われる大

先輩三十数名の方々に、お尋ねした。「あゝ博浪の」の校歌の作詞者は雪窓となつており、雪窓は竹ノ内節二と聞いているが、中島喜久平氏に代つたその間の事情をご存知あればお教え願いたいといった文面で、はがきを出したわけである。それらの大先輩は岩本義恭、諏訪頼長、岩波純一、武井伊平、北村勝雄、小口宣衛、中島重一氏ら学友会誌第一号発行当時の方々であった。その返事は半分ほど集まつた。内容は、約三分の一が「私は中島喜久平の作品と今日まで信じていた」また三分の一が「そのようなことは全然知らなかった」といつており、残りの三分の一は「竹ノ内節二作といふことを聞いたような気がするが、それも何時のことかわからず詳しいことは全く知らない」というものであった。ただ二人、諏訪中片羽の立木正氏（健在、第4回生）だけは「竹ノ内節二さんの作と聞いている」と答へられた。

竹ノ内節二は、後に朝日新聞記者となり、操風界で活躍した人である。学友会

誌第一号は節二の三年生の時の発行であるが、節二の極めて豊かな文才からすれば、この作詞はそれほど困難な事ではあるまい。現在の竹ノ内家には、当時の節二の遺稿は四散してほとんど見当たらない。節二が雪窓という雅号を用いたことは、教科書に採られた雪窓文庫の印で明らかで程度で、それで「あゝ博浪の」第二作詞と断定するは、資料不足のそりをまぬがれない。そんなわけで、意気込んで私の調査活動は、遅々として進展せず、そのうちに当時の事情をご存知の大先輩は、次々次々と他界され、何時とはなしに傾倒して、私自身も、関心を失つてしまった。

昨年秋、原田福太郎君が拙宅に見えられ、たまたま談、八十年史編纂に及んだ。その時、かねてから私の心の底にあった「あゝ博浪の」の作詞者の謎についてお話をした。原田君は、それは初耳だといつて驚き、調査を約してくれた。そして原田君の異常なほどの熱意は、別項の通り、あらゆる角度からの検討が行われ、かなりの点が明らかになった。しかし、中島喜久平が竹ノ内節二の断定を下すまでには至っていない。いずれにしても八十年史編纂の上で、この問題はほかふりして通り過ぎることは出来ない。ともかく、明らかでない点は、その作詞者が雪窓であるということである。敢て一文を草し、同窓生の周知を集めての考証を期待するのである。

（岡合日日新聞社長）

「博」は誤り

博浪は明らかに博浪沙のことです。河南省博浪の東南にある地名で、史記の秦始皇記や漢書の張良伝には、共に博浪沙となつていますが普通博浪沙とされています。

「張良が、秦に滅された韓王の仇を報いようと、金財産をなげうって刺客を探したところ、東海に力士を得て、重さ百二十斤の鉄椎を作り、秦の始皇帝を博浪沙に於て狙撃させた。しかし、その鉄椎は、始皇帝の車に中らず、誤つて副車に



中島喜久平氏
(二高一年)



雪窓 竹ノ内節二氏
(廣中三年)

学友会誌第1号に載った校歌試作の3編

校歌試作

(巻)

北の方、雄嶺を駆け上り、遠くは河原？、海原か、
！ 誰かが如くに。かゝる宵の夢は如何なるらむ。

(一) 雄しりける山々は
うらに清らる雪嶺の水
雄嶺の城の形して
(二) 東、西に空に入る
高き雄嶺の影連いつ
清き心と夢なつて、
(三) 月、白雲の影を如く
岩根に輝け岸を鳴ひ

(七) 其理は山に生立ちて
海拔二千五百尺
雄嶺をよこへに雄嶺の國

全上

(一) 東に高く八ヶ岳
大和島根の對岸と
湖山の中にえ立つ
(二) 雄嶺の上の
衣ヶ崎の
昔松よ
(三) 反は、
(四) *
(五) *
(六) *

西にはひたす雄嶺の國
信濃にしろく、
吾輩は会と仰がすや。
白雲のかけものはかなる
大空の時を望みては
月、月の通んぬ

わした希望の色に映え
夕、光の輝と照る。
自然と美なる雄嶺の國。
雄嶺の富士の影の
足上に消えぬ白雲の
集うやこゝに四百人。
集うやこゝに天國の
温かいとて
鳴き雲と雲にて

茅野儀太郎

寒水郎

毎

力強い支部の活動

原村・東海の2支部が誕生

肩を寄せ合い校歌

感激も一人の発会式

=====東海支部

母校創立以来八十有余年
り拙速を尊んだうらみはあ
待望久しかった同窓会支部
が、親郁と菊薫の昭和五十
一年十一月五日中京の地に
呱呱の声を上げた。
短い準備期間と発起人諸
氏の多忙に基因して、不行
届の面が多々あり、巧遅よ
事が出来た。

名古屋市五山会館の会場
正面には墨痕鮮かな「諏訪
清陵高等学校同窓会東海支
部発会式」の大横断幕が新
旧二つの懐かしい梶の葉の校
章の間に掲げられ、更には
中央からは「一千万人」と雖も
我行かん」の垂幕（実は手
拭で代用）が錦上花を添え
て懸けられている。
議事は発起人代表奥山清
氏（三十二期）の開会の辞
によってスタート。小生
（山田一次四十二期）の経
過報告の後、会則の審議も

無事終了、役員を選任を計
る。開会が大幅に遅れたた
め充分な検討の余裕がなく
止むを得ず、発起人が幹事
選任の委任を受け、後日、
早急なる役員決定を約す。
続いて小菅校長の挨拶、本
部からの報告事項があり、
奥山氏（前掲）の開会の辞
により支部発会式を終了し
た。

か且つは熱っぽいふんい気
の中で始まった。
久しぶりに（中には三十
数年振りであった方々もい
た）相会うなつかしい先輩
同期又後輩との交歓は何時
果てるともなく、宴半ばに
して会場を揺がす校歌、応
援歌の大合唱が続く。白髪
の又禿頭の（失礼！）いい
年の親爺共が、目をうるま
せ、腕を振り、肩を抱き合
い、胸間声を張り上げて古
き良き青春の一ページにと
つぶりとひたっている。嗚
呼母校とは良きものかな、
同窓生の連帯感はいかにも強
いものか。

◆支部所在地
名古屋市中区大須4-2
121-52
錦見産婦人科医院 錦見高
弘方（42期）電話052
241-0518
◆発起人代表
32期奥山清、33期吉江佐太
郎、42期錦見高弘、42期小
山良治、42期山田一次、57
期田中真彦、59期小松久夫

「故郷で語ろう」

全国から90名集う

=====原村支部

母校創立八十周年を記念
して八月十五日原村支部同
窓会が開催されました。昨
年十一月の母校記念総会の
感激が醒めない年頭早々よ
り計画が始まり、名簿の作
成等在郷の会員で着々準備
をすすめる「故郷で語ろう」
をスローガンに全国各地で

活躍中の会員を網羅し、つ
いにかつて機会をもてなか
ったこの集いが実行できま
した。
会員数三百十余名、うち
物故者八十数名の動静が大
方掌握でき、出席者名簿を
兼ねた会員名簿もでき上り
茅野市在住の九十才を過ぎ

た大先輩をはじめ、在郷は
むろん全国からこの日を待
ちわびていたかのように、
九十名に及ぶ会員が故郷に
開発された桜ノ木荘の会場
に集って来ました。
会場には母校の写真パネ
ルが展示され、清陵健児
よがと檄を掲げテーブル
の上に欠席会員からの「残
念だ、是非次の機会を」の
手紙数十通が配置され目を
ひきました。計画された式
次第は充実に、笑顔と拍手
で記念撮影、記念植樹もし
御出席頂いた小菅校長、大

森同窓会長さんのお話や先
輩、後輩のひざつき合せて
の歓談が薄れかけた清水ヶ
丘時代を強烈によびもどし
たかのように、長いはずの
夏の日短く、激しい夕立
も知らぬ間に過ぎてしまっ
たようでした。雨上りの高
原にあかあかとファイアー
ストームの火が燃え、別れ
を惜しみながら再会を約し
て散会しました。
この集いは成功し、組織
づくりに役立ち、今後の活
動のものとなるものと思ひ
ます（小林貞三郎記）

思えば支部結成の企画は
我等四十二期小山良治君、
錦見高弘君等の語らいの中
からスタートしたもの、
本部の古原源之助氏及び発
起人諸氏、特に三十二期奥
山清氏、五十九期小松久夫
氏の積極的協力がなかった
らかくもスムーズに事が運
びました。
十月二十三日 幹事会を
開き、原村支部の独立を正
式に決定しました。
募金状況も順調で、間も
なく目標が達成できる見通
し。

募金目標

達成へ

=====茅野支部

十月二十三日 幹事会を
開き、原村支部の独立を正
式に決定しました。
募金状況も順調で、間も
なく目標が達成できる見通
し。

かみしめるお葉漬け

支部長に小口楨三氏

東京支部

第十回東京支部総会は、

十月二十二日千代田区大手

町農協ビル八階国際会議室

で開かれた。五時半の開場

を前に、支部役員による会

場設営が行なわれる中、早

くも四時半には、受付に参

会者が姿を見え始めた。

昭和二十五年七月支部結

成以来、十六年目を迎えた

恒例の支部総会に集う同窓

生が、続々と詰めかけ、会

場に歓談の輪が広がって

いった。

開会を待つ間、岩波映画

提供の「生きものばんざい」

が上映され、この総理大臣

賞受賞の力作に対する拍手

と入れ替わりに、定刻を少

々廻った午後六時五分、

司会の片野満氏（56回）が

開会を告げた。

まず、新たに支部長とな

った小口楨三氏（36回）が

挨拶、支部運営についての

協力を要請した。中でも、

今夏逝去された小平権一氏

（4回）の御遺志で寄せら

れた基金による記念事業を

企画中との発表があり、関

心と呼んだ。

次いで、総務幹事尾沢賢

一氏（37回）から会務報告

があり、併せて説明のあつ

た五十年支部決算が、全

員の拍手で承認された。続

いて、支部登録会員四千

人という今日の支部活動の隆

盛に尽くされた前支部長森

元紀美雄氏（25回）が登壇

一同から感謝の拍手が沸き

起った。

出席者も二百五十余名を

数え、広い会場を埋める中、

総会は進められ、来賓とし

て諏訪から参加の学校長小

菅重男氏（45回）同窓会長

大森栄氏（22回）から、そ

れぞれ母校、同窓会の近況

が報告され、更に目下進行

中の八十周年記念事業につ
いて、事務局長の石井睦藏
氏（37回）から進捗状況の
説明があつた。そのあと総
会に寄せられた祝電が紹介
されて議事を終わつた。

引き続き懇親会に移り、
今は同じ同窓生の眞福を祈
つて黙禱が捧げられた。次

いで今井勇蔵氏（7回）が
大変お元気に乾杯の音頭を

とり、入学生次別に配され
た各テーブルを囲んで、賑

やかな懇談となつた。交歓
の続く中、22回生以上の先

輩にその御壮健を祝つて記
念品が送られ、会場にひと

きわ大きな拍手がわいた。

また、この日諏訪から届
いたばかりのお葉漬けや、

煮物、清酒といった故郷の
味を賞味しつつ、会場はす

っかり打ちとけた雰囲気な
に包まれた。

やがて、閉会時刻も迫り、
校歌斉唱となつた。吉沢利

雄氏（39回）の指揮で「東
に高き」、「ああ博浪の」

と往年の清水ヶ丘に思いを
馳せつつ唄ひ、午後八時、

来秋の再会を約して清陵岡
に終わった。矢崎悦郎（59）記

初めての総会

長野支部

6月14日中島会館で総会

を開催しました。長野支部

では、いままでは幹事会し

か開いたことがなく、総会

は今回が初めて。総会には

支部会員百二十名のほか本

部から原田福太郎、長沢教

頭先生が出席、会則決定、

役員選出などのあと懇親会

を開きました。

役員には次の皆さんが選

出されました。

▽支部長 五味連▽世話

人 五味連、清水方平（県

庁）茅野実（八十二銀行）

小島安雄（国鉄）小根沢淳

男（電々）小松昭太（中電）

千野武雄（農協）久保田貢

（信毎）五味武司（SBC）

北原貞吉（教育）▽事務局

幹事 茅野茂治、浜篤。

?????

総合選抜制となつたら、
校風といったようなものは
どうなることであらうか。

最近、同窓生の間で、こん

な素朴な疑問がさやかれて

います。八十年にわたつ

て培われた母校の伝統的行

方を憂え、その消え去るを

心配するは、無理からぬこ

と思ひます。

では、どうすればいいの

か、同窓会としても見て見

ぬふりをするでなく、会員

にも理解出来るような行動

をとるべきではないでしょ

うか。少くとも、検討の必

要があると思ひますが如何。

湖と山と

第39回 武川 忠一

（早大教授、歌人）

いつ凍る山のみずうみいつもわれに凍りしままの白き幻

凍らざる冬のみずうみ償いのかなぬ白き幻が呼ぶ

触れ合いて鳴るみずうみの薄氷の刃はせめぐ蒼き光に

薄ら氷は泥にこる湖の波にゆれ朝の淨き光を放つ

夜の湖の水にうつりともしびは喪の灯明りのごとくに沈む

冷えこごえやがて凍りし湖のこと思想のごとし訝え訝えとして

濃味をおしつみ寄る低き雲秋草の野は日昏れならねど

枯れそめて葉さきくらすむ高はらの草はろはろと滅びを動く

吹く風に雲のくらきに冷ゆる野の秋山われはここに育ちき

薄らかに山脈遠しとめどなき記憶の渦をはしる怖れぞ

財団法人の 幹事選出

三三三 諏訪市支部

なり、積極的に募金活動を行なった結果、目標七十万円に対して十二月までに倍額を突破しました。

財団法人の幹事には次の

十一月末か十二月上旬に、皆さん(いずれも支会長)懇親会を兼ね支部総会を開く計画です。

募金については、地元の文吉(豊田) 桑野正文(湖南) 細野正夫(中洲) 浜新うことで、藤森横次支部長はじめ、各支会長が中心と

感激した募金三つ

三三三 下諏訪支部 第50回 武井秀夫

本部募金委員会から下諏訪支部へは(一回生から二七回生までの分として)二

十二万円の募金割当が、示された。熱心で気の早い平山支部長は、早速、われわれ支部幹事に召集をかけ、

募金についての幹事会を行った。集まったのは平山支部長、町収入役の河西さん、

副支部長の石井さんあたりが六〇歳前後(?) あとはみんな三十歳台、四十歳台

のイキのいいところなので、四十数名の大先輩に対する割り当てや募金方法などが

ばかりであったが、特に感銘の深かった三人の先輩について皆さんに報告致します。

ボンと十五万円

第一番に第十八回生というお年寄りで、長年わが下諏訪の支部長として色々と苦勞されたM先輩の所へ参

上した。今まで支部運営には、関心がない訳ではなかつたが、当時はまだわれわれ小僧の出る幕でもないよ

うな雰囲気もあり、及び腰で来ただけに、吾々は少々気がひけていた。一同ドヤ

ドヤと玄關へ入り、早速寄付帳を出して、今回の募金の趣旨の説明を申し上げようとしたところ

「分っている。オレも支部のことは大分苦勞したが、今みんなこうやって大ぜいの若い衆が一生懸命やってくれるのを見るとうれしくてたまらない。十万円と書いてくれ」

という御託宣。実のところ三万円か五万円お願いできたら、という目算だったのだ。一同戸惑ってしまった。

おたずねしてみても、われわれ若い者の感激すること

回の募金の趣旨をもう一度申し上げる額を少なくしていただくようお願いしたが「遠慮することはないじゃないか」

とありがたいお返事。「それならば先生の意思を尊重しようしいように」と申し上げたところ

「本部募金へ五万円」「下諏訪支部へ十万円」と書いて下さり、その場で現金十五万円をさし出され

「ああ、こんな気持ちの良いことはない」と御満悦の様子であった。我々も、多少の懸念を抱

いていた募金の前途に明るいのを見出し、心暖まる思いであった。

戦死した息子の分まで雨は夕刻から降り続いており、今晩は中止かと思

っていたら、河西先輩から電話があり、予定通り廻ることになった。一廻りし終って一杯やりながら皆で語り

合う気持も格別なので、急いで夕飯をすませて出かけた晩のことであった。

S先生のところへお伺いし、寄付帳を出したところ、ちょっと考えておられたよ

うだったが、すぐにペンをとって「金三万円也」と書いて下さった。胸算用は一

万円だったの、すっかり恐縮して引下つたが、後日誰かが

「この間は先生からは戴き過ぎて。」と言ったところ

「あれは死んだ息子の分も含めて出しただよ」といわれたとのこと。S先生のご長男は諏訪中を卒業

して間もなく海軍予備学生となり南海で戦死されたと聞く。

八十七のお爺さんが三月十三日下諏訪支部の総会を行った。約七〇名

参加という昨年に次いで盛会であった。この時下諏訪支部の最長老U先生が受

付で金一万円也を募金の金だといって出して下さった。昨年の記念総会では募金

の話は出たが、また実際に募金は始まっていなかった。受付にいたM君が

「いすれやるたで、いいじゃないか、とっておけ」と言っていて、これまた何んと言っても聞いて下さらない。平山支部長に相談したところ、やはりお返しした方がよい、ということ再度お話ししたが、ついに引込めていただけずお預りする

ことにした。これが下諏訪町の募金第一号で、もちろん清陵の募金のもつ意味を考えて欲しいと思う。そして、この集まった金は極めて貴いお金であり、大切に有効に使われべきであると思

う。次号で会員の方の著作を紹介いたします

次号の同窓会報で同窓生でも結構ですがお知らせ下さい。著作を紹介したいと思

う。学術、文芸その他も年委員の方、支部の役員の方、ご足労ではあります。学

問、新旧、大小を問うが、この調査にご協力願います。著者

名、題名、その内容の簡単な紹介を直接同窓会事務局

たいと思います。素晴しい会報係宛、あるいは学年委

同窓生支那が出来るものと信じます。

エピソードいっぱい

八十年史のアンケート

諏訪清陵高校創立八十年

(作業中に地震で倒壊)へ

史の編集作業は、編集委員の手によって着々と進められているが、その資料収集の一環として行われた在職職員、同窓生を対象に行われた「アンケート」には、数多くの返信が寄せられた。

その中の幾つかが「八十年史」に掲載されるが、なかなか面白いものがある。整理の段階で目に止まったそのうちの一部を紹介してみよう。

昭和十二年から十七年まで教師を務めた堀田茂さんは「自治精神の徹底していたこと。長野中学の生徒会をつくるために北村達三氏(現信大教育学部長)と十人の生徒を連れ、一泊して指導を仰ぎました。寒中、足袋をはかぬ生徒が三分の一、外套(とう)は全員着用しない。湖上にてスケート大会の時は、素足で下駄スケートで競技をする生徒がいるのには驚きました。勉強方法、模擬テストの実施方法は他校ではまねのできない進歩的なものでありました。質問も多かったです。父兄と地方人が学校に

時)の日本無線湖南工場

信頼を寄せていたことも印象に残っています」と書いている。

大正十年入学の太田和彦さんは先生のエピソードの頃でこうつづけている。

「エピソードというほどのことは記憶にありませんが、名物的な先生のことでもが今でも話題になります。電灯を拒否したという漢文の菊池先生、地震等の異変があると矢立を持って調査して歩かれた有名な三沢先生、生徒のことを「オモートウハ」と呼ぶくせに「ゴザイマセン」といっていい言葉をつかいを挿入された牛山先生、赤ちゃんをおんぶしながら詩吟を歌われた河西先生等々……こんな名物教師は今日ではこの学校でも見当たらないでしょう」。

大正十四年入学の小尾郊一さんの生徒間のエピソードも面白い。「林百郎は一年一組の級長であったから一番で入ったことになる。私はヒリの方だから彼にはいつもコンプレックスを感じていた。かわいい声で起立、礼のかけ声に、いつも動かされていたもの

である。この一番がだんだん成績が下がり、ヒリの方の私がだんだん上がって行くことを、私は愉快に思っていた。阿木翁助(安達鉄翁)はデッセンとあだなし、今もってつきあっているが、彼の剣道における竹刀が力強く、またその痛さを感じ出すくらいである。いつも竹刀を持って阪妻のまねをしていたような記憶がある」

昭和九年入学の増沢一平さんは「考え方」の優勝旗争奪戦は全国の生徒を相手とって英・数・漢の三種目で覇を競った考え方の勉強競争。今は個人を中心としての塾の競争がこれに代わっているものの、学校単位の当時の競争はまた忘れることのできないものだ」とガリ勉時代を懐かしがる。

「生家の蔵に二冊残っていた日記を読んでみた。戦勝のニュースには純粋に喜び、友人に非難されたといっことは素直に反省する。世を憂えるかと思えば試験の成績に一喜一憂する。そして常に底流を流れているのは、目ざめつつある性との闘争である」と書いている

のほ昭和十四年入学の矢島利一さん。

女子が机を並べて勉強するようにになったのは戦後、新制高校になってからである。その一人、昭和三十一年入学の長田宏子さんは「女子が九人入学し、以前と違い大変大切にされ、森下太郎先生を中心にお茶とお菓子の会などを持ちました。女子は皆、男子と差別なしに扱ってほしいと要望したことがあります。修学旅行(女子はたぶん初めて)にも参加しました」とつづっている。

八十一年誌の編集をめぐる在京有志の座談会が渋谷駅近くで行われたあと、ガッコーの奥の上で、というアメリカ映画をみた。道玄坂や恋文横町のあたりを、懐かしにかられて歩いていたら、ロードショウ

を見逃したこの映画を上映している場末の映画館にぶつかっただけである。二十年前、諏訪から上京した当時、駒場の寮に入っていた関係で、よくこの界隈をほつつき歩いた。映画館は、むかしのままの場所にあるよう気がした。

みた人はご存知だろうか。ガッコーの奥とは、精神病院ひいてはその象徴する非人間的精神的な現在の管理社会を意味する。ジャック・ユルソンが力演する主人公マクマーフは、これに反抗して自由の精神の翼で独り飛ばうとする。が、果たせず、その精神を受け継いで、代って飛び立って行ったのが、インディアン

のチーフである。こう書くとは、何か深刻な感じがするが、上映時間のほとんどがコメディ調で、正気と狂気の混乱を描いて笑わせる。しかし、最後の五分間で、観客を感動で打ちのめしてしまう。

監督のミロス・フォアマンは一九六九年に動乱後のチェコから亡命した人。彼のこととは問題の本質をついている。今日、社会は余りにも組織化されてしまっているから、その体制が資本主義であれ社会主義であれ、また君主制であれ民主制であれ、そのシステムを受け入れかねる個人をどうするかという普遍的問題がある。どんな社会でも、悲劇は、我々が何の疑いもなく、盲目的にそのルールが法律になっているというだけで従っていることにある。

この映画をみながら、諏訪人の特性を考えたい。わりと自己主張が強いうえ、他人とは一味違った個性を持ちたがる人が多いようだ。しかし、それでいて、全体の流れからそれることを恐れる。映画の主人公のように、あくまで体制に反抗する強靱な精神は持ち合わせていない。さらに、深刻な話をするときには、本心に深刻になってしまふ。笑いや冗談のオブラートに包みこんで、本心を打ち明けるなどという、ゆとりのある芸当はとてもできない。いや、これは諏訪人というより、日本人に共通した特性というべきなのだろう。

(朝日新聞記者)

深刻な話と笑い

第59回 高橋文利

八十一年誌の編集をめぐる在京有志の座談会が渋谷駅近くで行われたあと、ガッコーの奥の上で、というアメリカ映画をみた。道玄坂や恋文横町のあたりを、懐かしにかられて歩いていたら、ロードショウ

を見逃したこの映画を上映している場末の映画館にぶつかっただけである。二十年前、諏訪から上京した当時、駒場の寮に入っていた関係で、よくこの界隈をほつつき歩いた。映画館は、むかしのままの場所にあるよう気がした。

みた人はご存知だろうか。ガッコーの奥とは、精神病院ひいてはその象徴する非人間的精神的な現在の管理社会を意味する。ジャック・ユルソンが力演する主人公マクマーフは、これに反抗して自由の精神の翼で独り飛ばうとする。が、果たせず、その精神を受け継いで、代って飛び立って行ったのが、インディアン

のチーフである。こう書くとは、何か深刻な感じがするが、上映時間のほとんどがコメディ調で、正気と狂気の混乱を描いて笑わせる。しかし、最後の五分間で、観客を感動で打ちのめしてしまう。

監督のミロス・フォアマンは一九六九年に動乱後のチェコから亡命した人。彼のこととは問題の本質をついている。今日、社会は余りにも組織化されてしまっているから、その体制が資本主義であれ社会主義であれ、また君主制であれ民主制であれ、そのシステムを受け入れかねる個人をどうするかという普遍的問題がある。どんな社会でも、悲劇は、我々が何の疑いもなく、盲目的にそのルールが法律になっているというだけで従っていることにある。

敗軍の将少しく兵を語る

―群馬県知事選落選の記―

第43回 山田ゆずる

1 立候補の決意

五月上旬、群馬県選出の田辺誠代議士(注・社会党)に呼ばれて、「群馬県内の革新新政党(注・社・公・民・共)と労働二団体(注・総評系・同盟系)が一致結束して、是非知事選に出てもらいたいと願っているが、承知してもらえないか」と内密にもかけられた時は、私も相当驚いた。当時私は、雇用促進事業団の総務部長の職に在ったが、つい一月前までは、群馬労働基準局長として、一年八カ月程、群馬県前橋市に住んでいたことは確かである。然し、既に、東京に転勤してしまつたあとに、このような要請を受けるとは思いもよらなかった。私はもちろん、即答をささないで、独りであれこれと考えてみた。結論として

私は、これを受諾することにした。私は、元來血の気の多い方であるし、感激し易い方である。何よりも嬉しかったのは、革新系から推されたことであつた。

私は、まがりなりにも働く者の保護と生活の向上をモットーとする労働行政にたずさわつたはしくれである。

その私が、働く者の側から推されたということは、公務員賃金に反響するという気がした。同時に、一度群馬を去つた私に対して、こうした形で要請をされた事については男として、その意

氣に感じないわけにはいかなかった。一週間後、革新四党二団体の代表者達が、そろいふみで正式に要請に

来られた時、私は、一切の条件を付けずに、これを受けたのであつた。

2 激しい選挙戦の展開

翌、五月十八日、直ちに

前橋に飛んで記者会見をし、私の決意表明をしてから、七月二十五日の投票日まで約二月半、血みどろの選挙運動が展開された。告示までの一月半は、主として、各党各団体の組織に対するあいつまわりに終始したが、場合によって、政党団体をはなれて、個人に對する有力な支持者をひそかに訪問して協力を要請することもあつた。それは、文字通り、分秒きみの殺人的なスケジュールであつた。

私は、ある時は雪降る梅雨にびしょ濡れになりながら、ある時は、梅雨の合間の照りつける太陽の下でクラクラになりながら、ひたすら上州の山野と街を駆けめぐつた。殆んど、連日のように各地で起集会がもたれ、私はアタレのタレントまがい、華やかなラットライトを浴びながら、

三千人の聴衆を相手に演説を打って、万衆の拍手に包まれたこともあつた。

六月三十日の告示以後、行動の内容はガラリと変わった。私に与えられた新しい仕事は「山田ゆずる」の樺をかけ、白手袋を着用させられ、乗用車の助手席に坐り、絶えず数台の遊説隊と四、五人のうぐいす嬢を従えて、県内くまなく、デモ・ストレーションをして歩くことと、二十数都市での立会演説会に参加することと、一日の日程が終つたあとに各部落で行なわれる個人演説会に顔を出すことであつた。行動の内容は変つたけれども、スケジュールの激しさは、以前に優るとも劣らなかつた。私は、そのスケジュール通りに頑張り抜いた。

わが方のムードは上々であつた。成田、江田、石橋、野坂、多田といった中央政界の大物や、美濃部、畑、中曾根氏は、日の丸鉢巻をきりと締め、とても大々的の幹事長とはみられないあられもない恰好で、子分の叱咤激励に狂奔した。

また、「山田が知事になれば公共事業が半分に減る」といって建設業者をたぶらかし、商工業者に対しては「山田を支持すれば金融をストップする」といっておどかし、旅館業者に対しては「山田は公害をきびしく取締るから、普通の旅館はなりたたなくなる」ととても常識では考えられないような悪宣伝にこれつとめたりした。更に、笑止千万にも「山田は、落選すれば埼玉県の副知事になる」とにきまつている」といふふらし、いかに私が、群馬の知事選に本腰を入れていないかを吹聴しようとした。残念なことに、これらの悪宣伝は、かなり効を奏したようである。田中逮捕を投

票日直後に行なつたのも、明らかに、群馬の知事選を意識してのことであつた。

何れにせよ、私は、今や敗軍の将になつてしまつた。まさしく兵を語る資格はない。しかし、激しい闘いの最中、同級生の原田福太郎君が、はるばる銘酒「真澄」のこもかぶりの大樽と、同級生の激励のサインを一杯

また、「山田が知事になれば公共事業が半分に減る」といって建設業者をたぶらかし、商工業者に対しては「山田を支持すれば金融をストップする」といっておどかし、旅館業者に対しては「山田は公害をきびしく取締るから、普通の旅館はなりたたなくなる」ととても常識では考えられないような悪宣伝にこれつとめたりした。更に、笑止千万にも「山田は、落選すれば埼玉県の副知事になる」とにきまつている」といふふらし、いかに私が、群馬の知事選に本腰を入れていないかを吹聴しようとした。残念なことに、これらの悪宣伝は、かなり効を奏したようである。田中逮捕を投

票日直後に行なつたのも、明らかに、群馬の知事選を意識してのことであつた。

何れにせよ、私は、今や敗軍の将になつてしまつた。まさしく兵を語る資格はない。しかし、激しい闘いの最中、同級生の原田福太郎君が、はるばる銘酒「真澄」のこもかぶりの大樽と、同級生の激励のサインを一杯

また、「山田が知事になれば公共事業が半分に減る」といって建設業者をたぶらかし、商工業者に対しては「山田を支持すれば金融をストップする」といっておどかし、旅館業者に対しては「山田は公害をきびしく取締るから、普通の旅館はなりたたなくなる」ととても常識では考えられないような悪宣伝にこれつとめたりした。更に、笑止千万にも「山田は、落選すれば埼玉県の副知事になる」とにきまつている」といふふらし、いかに私が、群馬の知事選に本腰を入れていないかを吹聴しようとした。残念なことに、これらの悪宣伝は、かなり効を奏したようである。田中逮捕を投

票日直後に行なつたのも、明らかに、群馬の知事選を意識してのことであつた。

何れにせよ、私は、今や敗軍の将になつてしまつた。まさしく兵を語る資格はない。しかし、激しい闘いの最中、同級生の原田福太郎君が、はるばる銘酒「真澄」のこもかぶりの大樽と、同級生の激励のサインを一杯

また、「山田が知事になれば公共事業が半分に減る」といって建設業者をたぶらかし、商工業者に対しては「山田を支持すれば金融をストップする」といっておどかし、旅館業者に対しては「山田は公害をきびしく取締るから、普通の旅館はなりたたなくなる」ととても常識では考えられないような悪宣伝にこれつとめたりした。更に、笑止千万にも「山田は、落選すれば埼玉県の副知事になる」とにきまつている」といふふらし、いかに私が、群馬の知事選に本腰を入れていないかを吹聴しようとした。残念なことに、これらの悪宣伝は、かなり効を奏したようである。田中逮捕を投

票日直後に行なつたのも、明らかに、群馬の知事選を意識してのことであつた。

何れにせよ、私は、今や敗軍の将になつてしまつた。まさしく兵を語る資格はない。しかし、激しい闘いの最中、同級生の原田福太郎君が、はるばる銘酒「真澄」のこもかぶりの大樽と、同級生の激励のサインを一杯

また、「山田が知事になれば公共事業が半分に減る」といって建設業者をたぶらかし、商工業者に対しては「山田を支持すれば金融をストップする」といっておどかし、旅館業者に対しては「山田は公害をきびしく取締るから、普通の旅館はなりたたなくなる」ととても常識では考えられないような悪宣伝にこれつとめたりした。更に、笑止千万にも「山田は、落選すれば埼玉県の副知事になる」とにきまつている」といふふらし、いかに私が、群馬の知事選に本腰を入れていないかを吹聴しようとした。残念なことに、これらの悪宣伝は、かなり効を奏したようである。田中逮捕を投

票日直後に行なつたのも、明らかに、群馬の知事選を意識してのことであつた。

何れにせよ、私は、今や敗軍の将になつてしまつた。まさしく兵を語る資格はない。しかし、激しい闘いの最中、同級生の原田福太郎君が、はるばる銘酒「真澄」のこもかぶりの大樽と、同級生の激励のサインを一杯

また、「山田が知事になれば公共事業が半分に減る」といって建設業者をたぶらかし、商工業者に対しては「山田を支持すれば金融をストップする」といっておどかし、旅館業者に対しては「山田は公害をきびしく取締るから、普通の旅館はなりたたなくなる」ととても常識では考えられないような悪宣伝にこれつとめたりした。更に、笑止千万にも「山田は、落選すれば埼玉県の副知事になる」とにきまつている」といふふらし、いかに私が、群馬の知事選に本腰を入れていないかを吹聴しようとした。残念なことに、これらの悪宣伝は、かなり効を奏したようである。田中逮捕を投

票日直後に行なつたのも、明らかに、群馬の知事選を意識してのことであつた。

何れにせよ、私は、今や敗軍の将になつてしまつた。まさしく兵を語る資格はない。しかし、激しい闘いの最中、同級生の原田福太郎君が、はるばる銘酒「真澄」のこもかぶりの大樽と、同級生の激励のサインを一杯

また、「山田が知事になれば公共事業が半分に減る」といって建設業者をたぶらかし、商工業者に対しては「山田を支持すれば金融をストップする」といっておどかし、旅館業者に対しては「山田は公害をきびしく取締るから、普通の旅館はなりたたなくなる」ととても常識では考えられないような悪宣伝にこれつとめたりした。更に、笑止千万にも「山田は、落選すれば埼玉県の副知事になる」とにきまつている」といふふらし、いかに私が、群馬の知事選に本腰を入れていないかを吹聴しようとした。残念なことに、これらの悪宣伝は、かなり効を奏したようである。田中逮捕を投



小平権一氏を偲ぶ

諏訪中学校第四回(明治三十一年)入学の小平権一 政調査会会長などを歴任された人である。

小平さんはまじめで地味な人ではあったが、日本の農政に大きな影響力を及ぼした。ありし日の大先輩をしのび、夫人のいっしょに思い出をつづっていたとき、

小平さんが米寿(八十八歳)の時今は故人となられた義弟(いっしょの弟)金井満さんが小平さんについて書かれた手記を収録することにした。金井さんも清陵高長、農林中央金庫監事、農

思い出

小平 いち

四十年前の事である。ある日、第一銀行取締役の小平省三氏をお訪ねした時の事である。省三様から「小平権一さんのなる事を見てみると、何か人たちがたつ所がある。すぐれて

いるのは何故かと思つたら、小平さんはクリスチャンであるという事がわかった。私はそれでクリスト教会に行く様になった」といわれ

終わった。このようなよい立派な仕事にはだれでも喜んで、進んで寄付をされるものと考えたのはあまりにも甘い考えであった。その当時はみんな自分の生活が容易ではない時であったから。

また善導農村福祉会館児軍会館建設計画というを考へ、その発起人には当時の有力者を並べ、協力を誓ったものである。農村少年たちのために。

主人の性質は誠に穏やかであつた。自分の仕事に夢中で、他の事には関心がなかつた。怒る事はめつたにな

いけれど、私の愚かさに折々「馬鹿で馬鹿で馬鹿さ加減がわからない」などといわれたが、それはどんな時であつたかよく記憶がない。子供の小さい時、ある夏あ

まりにも暑かつた。その当時の東京は今の東京より暑かつた様に思う。クーラーなどは勿論なく、扇風機さ

あるか。百姓が避暑に行くか」とひとく叱られた。そのころの主人は小作法案を作るため気狂ひの様になつて役所から帰るのは毎晩おそく、二時、三時になる時もあつた時代である。

農林省を退職した時頂戴した退職金は、大した事ではなかつたと思ひますが、そのほとんど全部を農林省の運転手ご一同、守衛ご一同、共済会へ、その他、何々へと寄付してしまひまし

た。その時吉川久衛氏(現代議士)曰く、「どの次官もこうして下さるといいですね」。

また終戦後財産税という徴収するといふので、皆財産をすべて書いて届けよといふ事がありました。私の知っている人の大部はそんなもの出さなかつたらしいのに、小平は正直に、ろくにありませんのにすつかり書いて出しました。その時、金額の何割か何分かを税金として徴収するとい

う法律であつたのをみて、自分で計算してましたところ、税務署から来た税の額は自分の計算より少なか

つた。これは税務署がまちがっている、わざわざ税務署へ言いに行き、多く書き替えてもらつて来ました。脱税係を大会社ではおくと聞きますのに、何とお金のいらない人だつたでしよう。おかしい事がまだ沢山あります。逸話の多い人で沢山でございました。

九十二歳までの長生きをしました小平の健康法は何もありませんでした。お薬は何も使いませんでした。健康のためのお薬というを常用する人が多くあります

が、それから指圧とか、按摩とか、体操とか、マッサージュとかすべて何もみせ

ませんでした。晩年毎日近所の散歩を一年前まで私がついてしました。大病は五十五歳の時盲腸炎の誤診で死に

義兄小平権一のこと

第19回 (改) 金井 満

小平権一は茅野市米沢の出身で、父は小学校の校長を長くした。

権一は村の小学校は高等科三年まで、四年の時受持ちが父である故をもって、諏訪中学に入学し寄宿舎

に入り、入院三カ月位位になおりました。昭和三十六年一月、松本市で脳軟化症(?)を起したのに独りで帰つて来まして、全然口がきけなくなつて、それも次第に癒え、翌三十七年十月私をつれて係に約束して来たとして、アメリカに行きました。私に対してはお礼のつもりで様でした。何も申しませんが。

趣味につきましては、実に何もありませんでした。甚も将棋も全然駄目。ゴルフなどは「ゴルフをしたければブラジルに行つてせよ」などと申しました。庭を築

たので、おりおりこの寺の池の鯉を盗みに行き、みつかりそうになつて縁の下にもぐりこんだとか、面白い話が数々ある。同志社は、東京に建築されてからは、

「同志社」と字を替えた。この冷水浴をした場所に同志社を記念すべく、「同志社記念の碑」というのが社員

の寄付で建てられた。其の日は、ありし日の罪ほろほしに立派な鯉数尾を池に放流した。中川紀元画伯が中学五年の時に作られ

た。

この同志社は、地藏寺のそばにあつて、寺の瀧の流れのところで、舎生は毎朝冷水浴をした。同志社の食物は誠に粗末のもので、殆んど大豆の煮豆が主であつたので、おりおりこの寺の池の鯉を盗みに行き、みつかりそうになつて縁の下にもぐりこんだとか、面白い話が数々ある。同志社は、東京に建築されてからは、

「同志社」と字を替えた。この冷水浴をした場所に同志社を記念すべく、「同志社記念の碑」というのが社員

の寄付で建てられた。其の日は、ありし日の罪ほろほしに立派な鯉数尾を池に放流した。中川紀元画伯が中学五年の時に作られ

た。

た。

た。

た道志社卒業生を送る歌にある通り、親はそれぞれが、皆兄弟のようになつたらしい思い出にふけり今を昔と語り合うのを楽しみにしている。道志社の歌は、其の他伊藤長七作や島本赤彦作など立派なものがあつた。

初め東京帝大の工科に入つたが、後、日本は農の国であることをさと、農科に転じた。彼は、本郷教会の海老名正先生から洗礼をうけ、キリスト教徒となつたが、結婚後は、妻に内村鑑三先生のとて聖書を学ばせた。なお農科大学卒業後、法科に入り、其の間、高等文官試験に合格、法学士となり、農商務省に就職、農林行政に終始した。道志社は大正六年の秋、農科大学を出てから、東京にも寄宿舎の必要を認め、道志社を建築すべく、資金の調達には府立第五中学校の校長伊藤長七氏とともに、苦心し、其の紹介により井上角五郎氏より借金をした。其の借金三、〇〇〇円を懐にして、夜道を帰つて来ると、丁度非常線に引つかかた。調査があちこち

ちに警戒していた。これはいけないと逃げ出したので、早速つかまされて、千駄木の交番に留置されてしまった。自分はこういう者だ

と、農学士小平権一という図書館券を見せたけれど、こんなもの盗んで来たろうと信用してくれない。夜中、調査がかわるがわる来て、姓名をいえと責められた。翌朝一寸したすきを見て、同級生のところへ電話したので、すぐ来て弁明してく

れた。其の時の小平は、汚い服装で、藁履の切れたのをはいていたので、署長は一応あやまつたあと、「これからもう少しちゃんとした身なりをしてくれ」と、いったという。東京の道志社は小石川林町に建てられたが、大正六年の秋、ひどい台風があつた。其のちよつと前に品川御殿山の金井清(義兄)の家に留守

番にいった。この家の二階がゆれる程であつたので、小平は「これで道志社はつぶれるぞ」と、翌朝役所に行く前に見に行ったら、案の定つぶれていたという。その後、巣鴨に今度は、し

っかりした道志社社員のを付で再建したが、戦災で焼失してしまつた。

道志社の出身者は、東京諏訪合せて八〇〇余名。現存者は各方面に活躍している。元印度大使那須皓博士、科学技術庁長官木内四郎氏、中川紀元画伯がいるし、其の他故人には、戦艦大和の艦長有賀幸作氏、日本国民高等学校の創設者加藤完治氏、元氣象台長藤原

咲平氏其の他数多くいる。さて「農業金融論」は、農林省勤めの多忙の中で、何年も書き続けた。常に原稿用紙を持参して時間があれば、どこでも書く有様。其の書きためた原稿の重い風呂敷包を電車の網棚におき忘れてしまつた。役所の人々も同情して、大さわ

ぎで八方探したが、遂に出てこなかった。小平曰く「まあいいや、また書くから」と平気でいたことは、有名な話である。当時の農林省は極度に忙しく、毎晩おそく帰宅して「ああ十二時か、まだ早いね」と風呂敷包をひろげて書き始める。こんな日が何年も続いた。

体は極めて頑健で、神経も太かつた。疲れたといった事がない。新聞記者が夜おそく訪問して来る。また役所から帰らないので、外で自動車の中で待つてゐる。話がすんで二時近く引きあ

つてゐる。記者達は「先生の体はどういう体ですか。僕達は翌朝は昼まで寝てい

る。先生は、朝は又早く役所に出動する。風船玉か、おき上りこぼしのようで、どこからついても、ヒョッコツと起きあがつて、平氣でいる」と感心していたとい

う。大正六年頃、米騒動があつた。其の頃、茨城県の六人の農民より我々愛国の志士五人(本名で)は閣下の命を頂戴するという血判をおした手紙を受けとつた。それには「今農民は極度に困つて、娘を売る相談をしてゐるくらいである。閣下は毎晩芝居を買つたり、ダンスをしたりしてゐるだろう」といふのである。これには恐れ入つた。当時、小平家にいた農村出のお手伝いさんが「農村の娘をここ

岩波義忠氏

中洲出身、諏訪中学校、拓殖大卒、日露実業に入社

その後、満洲糧穀会社、満洲農業公社などにつとめ、朝鮮、中国で活躍、戦後は諏訪郷友会の経営する学生寮長善館の復興につとめ、長善館の管理、学生指導につくし、昭和五十一年郷友

会の理事長をつとめられたが不幸にして八月九日不帰の客となる。

青木貞亮氏

明治26年3月23日生。岡谷市西堀出身。清陵高校入

学年次12回(明39年)清陵高校同窓会東京支部顧問。十一月二日死去。

デンタル・サーゼリーの称号を得る。東京帝国大学より医学博士の学位を受く。学位論文は「歯牙発育機軸のレントゲン解剖学的研究」

大5年 日本歯科医学専門学校の教授

大9年 中央区京橋三片倉ビル内診療所開設大12年より鉄道省嘱託医として現在まで東京鉄道管理局嘱託医会並歯科医会、全国国鉄嘱託医会連絡協議会並歯科医会の各会長より各会名誉会長

昭和26年より日本歯科医学学会顧問

学生の起居する寮として開設以来85年全国でも稀なものである。この学生寮長善館館長として更に諏訪郷友会理事長として10年

余勤め、その後は顧問であつた。長善館が震災の大被害、続いて戦災の全焼と再起不能に陥つたこともあり、館長の責任と理事長の重責

を負い再三の難問を克服し今日有る仙川に近代的な寮を新生させた。諏訪郷友会中興の祖とあがめられ館生の勉学を助け、また種々諏訪の発展に貢献された。(諏訪郷友会事務局局長 篠原仁蔵)

八十周年総会記念ポートをどうぞ

創立八十周年の記念ポートが完成しました。昨年十一月行なわれまして記念式典、祝賀会のスナツプを中心に集録したもので、B5版十六ページ。式典の参加者になるべく多く顔を出すように配慮したとのことです。限定三百部、価格は五百円で、希望者は清陵高校内同窓会事務局(電話八一〇三五六)へ

諏訪湖 1 周に好記録

＝年寄りの冷水という勿れ＝

同窓生が24名も参加

第六十三回諏訪湖一周マラソン大会は秋晴れの十月三十日行われましたが、OBも二十一人参加しました。子郎(42回)寿雄(48回)は毎回応援組、今回は記録係として参加、来年を期して早朝ランニングに励んでいます。また、記録係として山崎(吉田)滯子さん(37回・59才)が参加され、小菅校長先生(45回)も何とか完走された事は特筆すべきことであります。

した。井上(42回)小松(42回)の両先輩は今度は三回目の出場、山崎さん(51回)現PTA会長)は一回目で、記録も短縮して二時間を切るなどOBの活躍も年々盛んになって来ました。中でも遠方からの山本さん(41回)は驚異の一時五十六分、清水さん(52回)浜さん(60回)中村さん(79回)などわざわざ足労をいただし、神戸の向山博先輩(33回)からは祝電を頂くなど地元OBを刺激して大会を盛り上げて下さいました。

来年からはOBのゼッケンを揃え、OBの旗を用意するなどアピールもして、より多くの参加者を呼びたいと思います。

かという小生松崎(50回)



OBスタート

同窓生参加者は次の通りです。

井上(42回)小松(42回)	37回石井睦蔵	42回中島康夫	42回小松昌明	42回小松島子郎	42回今井芳樹	48回小菅重男	48回矢島寿雄	51回山崎壮一	52回清水進	59回牛山孝	59回吉田秀穂
記録なし	記録なし	記録なし	2・11・46	2・11・45	記録なし	記録なし	1・48・43	1・59・28	1・48・8	1・41・20	1・49・40
59回山崎雄二	60回浜安明	63回河西康之	63回横山嘉一	65回原英充	65回野口新太郎	79回中村好男	50回松崎元博	56回山崎(吉田)滯子	56回渡辺(伊予部)美枝		記録なし
記録なし	1・54・35	記録なし	2・15・07	1・38・0	1・51・11	記録なし					

名簿が出来ました

申し込み洩れの方はお早く

①発行口おくれる。

十一月中旬と計画し予告もいたしました。

月月初旬となりました。会報をご配布する頃には、発送体制が整う事になります。

ます。

②名簿購入のおすすめ。

予約申し込みは六千部に達しました。申し込み洩れの方は、残部が若干ありますので、左の要領でお願いします。品切れの折はご容赦のほどを。よってお早く。

③住所 職業等変更の折は

を添えて下さい。

金三千円也(送料含む)

を添えて下さい。

③住所 職業等変更の折は

を添えて下さい。

事務局では今回の名簿を基として、毎年追加、削除の更訂を行い、新しい動静をお伝えする計画です。住所、役職の移動の折は、事務局も知友の一人と考えていただき、同様にご一報下さい。

(名簿委員長 古原源之助)

会報委員会から

◎同窓会報第二号をお届け

することが出来ました。八

十年を機に会報を発行する

ことになって、矢つぎ早に

二号が出来上がったけれど、

素晴らしい出来映えとは、お

世辞にもいわれそうもない

し、編集者としても汗顔の

到りです。

◎会報発行で何時も問題に

なるのは、これが配布のこ

とです。郵送料が製作費の

二倍もかかるのでは、もっ

たいないことですが、みん

な会員が負担しているの

すから、一考を要します。

同窓生のよしみといったものが生まれて来ましょう。

◎次号には、募金の状況、

寄付者とその金額を会報誌

上に掲載することです。

もう一つは、同窓会員の著

作をお知らせして、同窓生

の社会での活躍ぶりを紹介

したいと考えます。たとえ

それが、既存のマスコミの

組織にも乗らず華々しい話

題を提供しなくとも、地道

に、黙々と有意義な仕事を

している同窓生各位の隠れ

たる努力を、発掘したいと

考えるからです。何卒ご協

力願います。

◎投稿を歓迎します。とく

に、学年委員の方には、同

級会の模様などお知らせ頂

けばと思います。もちろん

個人の方の腕白時代の思い出、

出、地方会のこと、是非知

りたいと思つことなどあろ

うかと思つています。遠慮無用

どしどし投稿を……。

◎会報発行にあたり原田福

太郎さん、田中吉泰さん

、あの方々は先輩だったのか、

大へんご苦労をおかけしま

した。改めて御礼を申し上げ

ます。